

十神山



会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会

☎692-0064
島根県安来市古川町534
TEL 0854-28-9988
FAX 0854-28-9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com

安来節との出会い



唄 准名人
高橋 栄子
(本部道場)

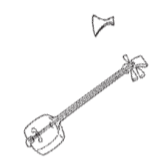
前号の会報五十二号で平成三十年度の上位昇格者の方々をご紹介させていただきました。この度の会報五十三号では、新たに准名人に昇格された五名の方に、安来節との関わりをご寄稿していただきました。

私と安来節



この度、はからずも唄・准名人位昇格の報を受け、身に余る光栄と深く感謝申し上げ、更なる精進をお誓いし、皆様には従前にも増してご指導ご鞭撻賜りますようお願いを借りてお願い申し上げます。さて、私と安来節の本題に戻ります。

最初に安来節を耳にしたのは、小学生の頃の昭和三十年前後、当時は、夏ともなれば各地の夏祭りや催物に安来節がもてはやされ、仁輪加にチームを作り、何日も掛けて各地を巡られたそうです。当時、山佐支部にいた兄の仲間の皆様が、家に寄られて稽古されるのを部屋の片隅で聞いた思い出が鮮明によみがえります。何とも言えない三味線の響き、鼓の軽妙な間合い、そして素朴な唄い手の節回し、これが私の安来節に対する原点です。父も三味線を弾きましたので、家系的に生まれ持ったものもあると思います。その後、兄が



母の趣味だった三味線を私も習いたくて、昭和四十九年から地元教室に通い始めました。最初は、長唄を習うつもりでしたが、入ってみるとそこは安来節の教室でした。何度もりズムを耳にしているうち、その魅力に取り付かれて四十五年が経ち、今日に至ります。夫や子供の夕食を用意して教室に向かい、家族が寝静まった頃に帰宅する日々でしたが、好きなことに専念する時間がとても幸せだったことを思い出します。

昭和五十七年、絃づくにびき国体の記念公演へ出場させていただきました。またその後、平成七年、江戸東京博物館の安来節公演で絃と升太鼓の演技を依頼され、そこで家元四代目渡部お糸先生との出会いがありました。安来節を世界中に

感動を呼ぶ 音色と 響き 丹念な加工 調整 仕上げ

(有)仁木三味線

製造・販売/修理 三味線・鼈甲撥・尺八・太鼓

〒240-0022 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西久保町197-1

TEL 045(713)4319 FAX 045(741)4796

HP <http://www.syamisen.com/>

初心を忘れず 感謝する



絃 准名人
花本 三重子
(浜田中央支部)

この度、唄・准名人の昇格に当たりまして、安来節保存会会長近藤宏樹様はじめ沢山の方々から祝福して頂き、感謝の気持ちと同

時にこの榮譽に対し、身の引き締まる思いで一杯です。昭和五十四年に米子支部に入会唄は心、心は顔に表れ、母音をしっかり、表情豊かにをモットーに頑張りたいと思っております。そして支部設立以来、初めての女性支部長を拝命して二期目に突入、微力ながら今後も会員共々伝統ある安来節の普及と発展に努力させていただきます。一生懸命精進致します故、皆様方のご指導ご鞭撻を賜ります様お願い申し上げます。

私と安来節



唄 准名人
坂口 美弥子
(米子支部長)

「人はみな豊かでなければならぬ、我々に関係ある人はどうしても豊でなければならぬ」これは主人が大切にしていた言葉です。お糸先生にお供した東北大地震の慰問、伊勢神宮、日光東照宮、安来清水寺などの奉納公演、ニューヨークのカーネギーホール、シドニーのオペラハウスなどでの海外公演で喜んでくださったお客様の表情やお言葉を思い出しますと、主人の気持ちに少しは近づけたのではないかと思います。



会員必携 図書

～メンタル・スキル 向上のために～

「よみがえる安来節」
価格 1,800円

基礎編

「唄われて100年の魅力」
価格 1,000円

発行 出雲街道民謡交流会
090-2809-1233 (渡部孝夫)

私と安来節を 振り返り



鼓 准名人
二代目 松尾英興
(松江支部)

昭和五十一年に安来節保存会に入会し、四十二年が経ち、人生の半分以上を安来節に関わって来

ました。今思うと、三味線、鼓、太鼓と民謡に関する事は何一つ知らずに入会しました。そんな中でも母親が唄っていた関の五本松節は

聞き覚えがあります。何もわからず友人に誘われ、最初に習った先生の下で唄、鼓、踊りと勉強して来ました。入会した昭和五十年初め頃は、民謡ブームの前で会員数も二千七百人前後でした。民謡ブーム後は一年に五百人位ずつ会員数が増えて来たが、カラオケブームが始まった事や若者の音楽志向の変化により徐々に会員数が減って来たように思われます。

生、先輩、同期の皆様のおかげと感謝しております。

安来節保存会という組織を思うに、他の民謡組織も同様、高齢化が進み、会員数の減少が懸念されます。そして、若年層の会員勧誘を考えなければいけないと思いますが、良策がなかなか浮かんで来ません。

安来節を知り覚えた事により、安来節の奥深さを知りました。昔から唄い継がれて来た俗に言う入事、アンコ入という唄と三味線の素晴らしい流れは後世に受け継いで行かなくてはいけないと思っております。

私達の習った時代は民謡ブーム真つ只中で同期も多く、良きライバルとして技量を競い合って来ました。今こうして、安来節保存会の活動に参加出来るのも諸先

私のどじょう すくい人生



踊 准名人
渡部泰孝
(松江支部長)

連で、これに対抗する為に新しく二人踊りを創り上げて大会に臨みました。その甲斐あってか全国大会に二年連続出場することができました。指導を受けていた故小川千吉先生の勧めで団員の数名が安来節保存会松江支部に入会(私は昭和五十年六月)してさらに技量向上を目指しました。

この度、安来節保存会より踊准名人にご推挙頂き、この上ない喜びとともに身の引き締まる思いでございます。

私は社会人になって島根町青年団で郷土芸能全国大会に向けて練習した銭太鼓・どじょうすくい。安来節との出会いでした。最初は銭太鼓要員でしたが、踊り担当の先輩が引退し、後任に抜擢されたのがどじょうすくいの始まりでした。県予選は石見神楽が優勝の常

昭和五十年代は民謡ブームで座敷演芸花ざかりでした。特に男踊り・銭太鼓の打ち手が不足していたため師範にも満たない資格の我々にも声が掛かり、演芸本番が稽古場という厳しくも有難い時間を体験させて頂きました。幸か不幸か私は踊りの師匠が無く、青年団の先輩から手順を教わってから保存会の諸先輩方の芸を拝見しながら、独学で所作や表情を研究して臨むしかありませんでした。

時には三代目富田徳之助先生の三味線、二代目出雲愛之助先生の唄で踊らせて頂くという夢のような巡り合わせもありました。後には家元四代目渡部お糸先生に目を掛けて頂き、大きな舞台も数多く経験させて頂きました。

見様見真似で始めて自分なりの解釈で踊って来た「どじょうすくい踊り」、今後も研究を惜しまず生涯現役を目指して精進したいと思います。

新生安来市の名誉市民(下)

並河健蔵

安来市は、平成二十六年十月、新生安来市十周年の記念事業を実施し、その中に名誉市民の制度を設けた。今回はこの栄誉を受けられた五名の内、初代渡部お糸氏と河井寛次郎氏の二人を紹介した。今回は、米原雲海・伊達源一郎・櫻内義雄の三氏の業績を紹介する。

米原雲海氏(本名・米原幸太郎)

(明治二年八月二十二日生、大正十四年三月二十五日没)



明治二年、安来町新町の漁業木山家に生まれ、十六歳で米原家の養子となる。

本名は幸太郎で雲海はその号。小学校卒業後、宮大工に弟子入りし建築彫刻を学ぶ。明治二十三年に上京し木彫界の巨匠高村光雲の門に入ると、三年のうちに展覧会入賞を果たし、二十六年に帰郷してからも中央の彫刻展で入賞を重ねる。安来町松源寺山門の仁王像は、この頃に松江の荒川龜齋と共作したもの。

明治二十八年には東京美術学校助教に招かれ再び上京するが、制作に専念するため二年で辞職。東京国立博物館に野外展示される「ジェンナー像」の制作では、初めて西洋彫刻の技法「比例コンパス」を用い、木彫界に大きな発展をもたらした。明治三十年代にはパリ世界博覧会入賞をはじめ数多くの功績をあげ、名声は一段と高まる。一方では、多くの門弟を輩出し、展覧会の審査員を務めるなど後進の育成にも注力した。明治四十一年には岡倉天心の知遇を得て日本彫刻会を結成し、伝統的

一方では青年育成の重要性を説き、大正五年には日本青年団の前身となる中央報徳会青年部を組織。また、井尻村の旧宅を地元の青年に開放し、戦後は公民館として寄贈するなど郷里へも貢献している。

鳥類研究者としても著名であり、世界で収集した一六〇〇点以上の鳥類標本は、県立三瓶自然館に所蔵されている。

櫻内義雄氏

(明治四十五年五月八日生、平成十五年七月五日没)



明治四十五年、広瀬町出身で商工大臣、農林大臣、大蔵大臣などを歴任した櫻内

幸雄の次男として生まれる。慶応義塾大学経済学部を卒業後、会社員を経て応召。兵役免除後の昭和十五年から父幸雄の秘書として政治家の道を歩みだす。

昭和二十二年の衆議院議員選挙において、東京一区から三十四歳で初当選。その後、父幸雄の志を継ぎ、郷里島根県から立候補した参議院議員選挙で当選。次々昭和二十七年の衆議院議員選挙でも島根県から出馬し当選以降、連続十八回の当選を果たした。

その間、池田内閣で通商産業大臣として初入閣し、佐藤内閣で通商産業大臣、田中内閣で農林大臣、福田内閣で建設大臣と国土庁長官、鈴木内閣で外務大臣等の要職を歴任したほか、平成二年には三権の長の一席である衆議院議長に就任。

一方、自由民主党の幹事長、政務調査会長、顧問等の重責に就任し、常に国政の中核にあつて日本国発展のため尽力した。さらにはスポーツ、文化、芸術分野においても幅広い要職を歴任し、その振興に寄与した。



©安来市

支部情報

小学生と
安来節



竹内 誠
(鳥取支部長)

鳥取市文化団体協議会の活動で「芸術の出前講座」について紹介します。

この講座には、短歌・油絵・書道・吟詠・写真等々十数個の講座があり、鳥取市内の小学五・六年生を対象に各学校に出向き、講習します。各学校は希望する講座を選定し、一回当たり約二時間の講習を三回受けて、最終日の講習後に発表します。この講座に「安来節」も参加し、毎年二校ずつ講習を続けています。

安来節の講座は、どじょうすくい踊りを教えていますが、伴奏には唄、三味線、鼓、拍子木とすべて生演奏を行います。子供達は、踊りだけでなく、音や声を聞き、唄や鳴り物にも興味を示してくれます。講習をしていると、すぐに覚える子、踊りになじめず、そつぽを向く子、一生懸命練習してもなかなか覚えられない子と色々です。それでも二



回目、三回目となると掛け声に合わせて上手に踊れる様になります。「よく覚えたね」と言う、「家で練習した」という子もいました。最終日の発表会では、どの学校とも上手に発表する事が出来ました。一校あたり十名程ですが、子供達が興味を示してくれるので将来が楽しみだなと感じています。これからも出前講座に参加し、子供達との楽しいひと時と、安来節の普及、宣伝に努めます。

会員の声「コーナー」

民謡界の
王座復活を願って



審査員
渡部 孝夫
(本部道場)

昭和五十年諏訪友春著「安来節大鑑」の発刊に寄せた、七代目保存会長飯塚静雄氏が次のように述べています。「安来節は唄う人にとって喜び悲しみなど喜怒哀楽の感情を唄い表すことが出来、また、聞く人の心を打つ他の民謡にはない非常に格調高い生活の唄です。今も民謡の王座に君臨していることもそれを裏付けていると思います。」

聞く人から民謡の王座と言われていた安来節はどのような安来節でしょうか。今の安来節との違いは、このテーマは近年私の心の底にいつもかたまりのようでありました。

答えを見つけようと色々なことを試みました。市民フォーラム、支部交流会、安来節基礎編の発刊、芸道のスキルアップの書籍の発刊、交流会と発表会の開催など事業を行っているうち核心と思われる結論を得ました。

根本にあるのは芸にかける情熱の度合いと、懸けている安来節が趣味か生活かの違いであるということ。この違いは表現する芸に大きな違いが出てきます。現在は安来節で生活をする人は少なくなりました。多くは趣味で安来節を愛好して

いる人です。この立場の違いは芸の表現に大きな違いが出ます。といっても、プロとアマチュアが修練する基礎の違いがありません。同じように充実した基礎訓練が行われておれば芸に差はないはずですが、舞台の上では明らかに両者の違いがあります。芸の上下はいつの時代にもあります。舞台を構成する芸人はこの差のある芸が混在して色彩が豊かになりますが、漫然とした芸では豊かになりません。舞台にかける意気込みが日ごろの芸の研鑽となり、元気で精いっぱい舞台が出来るのが王座と言われる安来節なのです。

その要素を考える上で、私は今回貴重な経験をしました。安来節保存会が保有しているSP盤のレコードをCDディスクに保存するという事業の依頼です。百十曲にも及ぶ曲数を二カ月かけて完成できました。古くは大正五年から昭和四十七年までの期間の安来節です。この曲数を年別に試聴したことが安来節の変遷を確認できたという貴重な経験でした。要素別に列記してみます。

- ・ 歌詞表現の違い、話し言葉に近くわかりやすい。ただし、言葉のアクセントが色濃く判別できないこともある。
- ・ 重点はメロディーより歌詞にあつて、歌詞が気持ちを込めて唄われている。
- ・ 歌詞はメロディー通りではないところがある。時には歌詞をずらし、強調された表現もある。
- ・ マイクのない時代、思い切つて声を出し歌詞にメリハリがある。

・ 発声は地声で低音が多いので、歌詞の判別がしやすい。

現在の唄い方は当時に比べ、高音で歌詞よりもメロディーの表現がより技巧的になっていきます。これは一般の人がちょっと唄ってみようとしたときに簡単にはできないことになります。

以上をまとめてみますと、なんといっても安来節は表現を豊かに元気でなければなりません。適当にできた芸では観客は納得しません。そして楽しい舞台でなければ見る人も楽しくなりません。この二つが出来て「民謡の王座」と言われるのでしよう。自分の芸に不安があるうちは舞台も不安に見えます。自信に満ちた芸は徹底した基礎訓練にあります。

これらのテーマは「出雲街道民謡交流会」の主題としています。これを実践するため発表会と交流会を毎年開催していきます。テーマの解説と実践を重ね、今年第七回を開くことが出来ました。毎回五十名前後の参加がありますが、少しずつ参加者に趣旨が伝わり、いつもより元気な舞台で会場はたいへん賑やかでした。今後も「元気で楽しい」安来節を目指し、この趣旨を広げるために出雲街道民謡交流会の活動を継続したいと思えます。



私の生き甲斐



長尾 和正
(尾高支部)

小学校低学年の頃から父が三味線、唄を楽しんでおりました。正月や何かの宴席には必ず三味線と唄の音が響き渡っていました。何時も心地よく心に響く音色が忘れられず、昭和五十五年のある日、知人の自宅で安来節を教えている教室があり、友人に声を掛けられ、覗いて見ると十人程の教室で三味線の先生と一緒に大声で唄っていました。終わると手作りの田舎料理がテーブルの上に並び、それが賑やかで楽しい教室でしたので、いつの間にか一緒になって唄っていました。そして初めて皆さんの前で唄う機会がありました。しかし、入会して二年目を迎えた年に病に襲われ、数力所の手術を受け、約六年の静養が必要でした。しかし、安来節を諦める事は出来ず、落ち込んでいた時に姉が三味線をプレゼントしてくれました。同じ頃に友人が声を掛けてくれ、すかさず尾高支部に再入会させて頂きました。身体の心配もありましたが、支部長さんや先輩の皆さんに励まして頂いたおかげで夏の全国大会にも出場させて頂きました。結果は悔いの残る大会でしたが、色々失敗して今は、その経験が私にとっては大変有り難い経験となりました。

今、身体の不安もいつの間にか忘れて、週二回の練習日が楽しみで私の生き甲斐として心の支えとなつています。一番楽しく感じるのは、資格審査の会場でのそれぞれの支部の仲間達で励まし合い、声を掛けたり掛けられたり、とても勇気付けられます。しかし、一段一段登っていくにつれて色々な問題に突き当たり、悩む事も度々あります。

何気なく安来節のしおりを開き驚きました。百周年の記念すべき節目に入会させて頂き、誇りに感じています。指導頂く皆さんは、三十年、四十年の大ベテランの方ばかりです。六十代の手習いですが、指導を受ける者として師弟関係を重んじ、新しい人間関係を大切に、そして新しい仲間作りに頑張ります。今後ともご指導よろしくお願い致します。

心づくしの安来節に魅せられて



岩佐 勝雄
(本部道場)

私が安来節と出会ったのは、幼少の頃、我が家が当家の荒神祭り、手拍子で聞いた安来節でした。当時、近所で三人の唄の上手い人がおり、高い声で次々と競って唄われる安来節を聞いた時、庄屋と狐、そして鉄砲の三拳の手(ジャンケン)で、かけ声と手振り、酒席が賑わう安来拳等、とても楽しかった事が今でも鮮明に心に残っています。

そんな思い出の中で、定年間近になつた年に安来節保存会に入会して今日を迎えています。人前に立って唄う安来節や三味線伴奏の醍醐味は、楽しみの出合いや感動を沢山作ってくれます。まさに芸は身を助けることわざの通り、ありがたい気持ちで強く感じています。

人生八十年と言われて久しいですが、古希を迎える中で、唄の師であります家元四代目渡部お系先生をはじめ、三味線の師でありました、今は亡き二代目渡部音吉先生から学んだおかげで、私の人生にこの上ない楽しみを与えていただきました。

特に三味線の審査を受けた時、先生の最後の弟子として師範に合格した際、先生の自宅で奥様と共に喜んで迎えていただき感激した事が思い出されます。また、師範に合格するまでの先生の教えは、「三味線はあくまで唄の伴奏だから「はずみ」の良い弾き方をしなさい」が口癖の指導でした。また唄をリード出来る事も大切で、何もわからない私をきめ細かく指導いただき、「かさねバチが大事」、「左手の小指を薬指に添えて自然の形にそろえる」、「親指と人差し指の間で上竿から下竿をレールのようにして滑らせる」、「左手首を下げないよう自分の姿を鏡の前で見ながら姿勢を確認する」等、姿勢の美しさまで指導いただいた事、そして芸には上がない奥深さがある事まで、未熟な私に教えていただいた事は、今後の大きな目標となっています。

このような私の経験の思いとは別に、高齢化社会が進展する今現在の会員数を見ると、毎年百日程度減少している中で、今後十年先を考えますと千人近く減る計算になります。

師となる先生方が弟子を取り、その集まりが現在の会員数であるならば、今後はそれ以外に地域の職場等に出かけ、昼休みや休憩時間等を利用して安来節の魅力や唄う時の発声が健康につながる事など、会員確保に向けた広報も必要ではないかと思えます。

本場の安来市では、東西を走る国道9号線や高速道の安来道路に「安来節とハガネのまち」と大きなモニュメント看板が立っています。安来節の地元が更に一丸となつて盛り上げる施策が望まれているのではと感じられます。特に、上位資格者が出演されている安来節演芸館は、全国に誇れる公演の場であり、観光客等の楽しみの舞台となつていますが、地元の方々にも県内外からの来客を案内してもらおう事やNHKや民放の「ふるさと民謡」等、安来節の関連する番組や取材が多くあれば全国的な宣伝になる事は言うまでもないと思えます。

末文になりますが、安来節の歌詞の中には人生を語るような内容がたくさんあります。そして、安来節を学ぶために要した多くの時間等も楽しみと心豊かな人生として大きな見返りとなる事は会員共通の思いではないでしょうか。

最近、とても元気の出る言葉をかけてもらった事が頭から離れません。それは、「八十代も現役」「若い者に負けるな」という激励のメッセージでした。

私は、この言葉を胸に秘め、少しでも会員が増えてくれるのを願いながら、残りの人生を安来節と共に楽しみたいと思う毎日です。

平成30年唄い初め会 支部競演結果

安来市長賞	本 部	道 場
安来市議会議長賞	加 茂	支 部
安来市観光協会賞	松 江	支 部
安来商工会議所賞	神 門	支 部
B S S 山陰放送賞	湖 陵	支 部
足立美術館賞	神 湖	支 部
家納喜賞	益 田	支 部
安来節演芸館賞	穴 道	支 部
	和 歌	山 支 部

この度、絃名人 三代目安達順吉様より安来節保存会にご寄付をいただきました。

寄付金 十万円

ご寄付につきましては、今後、安来節振興のために活用させていただきます。誠にありがとうございます。

訃 報

安部寿樹さん(松山支部長、踊 准名人、七十七歳)が平成三十年一月三十一日逝去されました。

安部さんは、昭和五十一年に安来節保存会に入会され今日まで安来節保存会に多大なご功績を残されました。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

事務局からのお知らせ

●会報「安来節」に原稿をお寄せください。

4月と12月に発行する会報「安来節」にご寄稿をお待ちしております。

安来節との出会いや思い、支部の活動や目標、保存会の今後などなど題は自由です。

いずれも1000字程度で顔写真(1年以内の物で使用後は返却します)も併せて送ってください。